

発表題目：

少数民族における災害後の復興プロセスと生活環境調整について

所属： 京都大学大学院地球環境学舎

氏名： 蔡松倫

1200 字程度で発表内容を記載してください。

1. 研究の背景

世界における人口の 41% は、気候変動により移住を余儀なくされていた。そのため、災害後の復興計画は多くの国で重要な課題とみなされている。しかし、災害後に実施される復興計画は、多様な物理的および社会的条件の制限により、常に被災住民のニーズを満たすことができず、いわゆる人為的災害を引き起こしている。近年、災害復興に関する研究が数多く行われているにもかかわらず、少数民族を主体とした調査研究は限られている。しかし、台湾の少数民族は漢民族と比較すると、経済力の脆弱に加え、特別な文化や習慣があるため、自然災害と人為的災害に対してより脆弱である。

2009 年 8 月 8 日、台風モロッコ台風は各地で洪水と土砂災害を引き起こし、台湾南部の山間部では特に深刻な災害をもたらした。700 人近くの死者と 1,626 戸の家屋の倒壊を発生し、被災した世帯の 73% が少数民族であったことは注目に値する。震災後、中央政府は NGO に恒久住宅の建設を委託し、台湾南部において延べ 3,302 軒の恒久住宅を完成させた。

2. 研究問題と対象

少数民族を主体とした災害復興に関する研究が十分に行われていない現状を踏まえ、本研究では、被災した台湾少数民族コミュニティを事例として、さまざまな危機に対応したコミュニティの実態を把握する。その内容は以下の三点に集約される。

1. 被災した少数民族コミュニティにおける災害後の復興プロセスおよび住民の参加度（自然災害の危機対応）
2. 災害後のニーズを満たさない場合、少数民族が取った対応や工夫（人為的災害の危機対応）
3. 自然災害の危機対応と人為的災害の危機対応の関係性（自然災害と人為的災害の危機対応）

本研究では、台湾南部の Rinari（リナリ）と Changzhi Baihe（チャンジー・バイヘ）再建集落を対象に、比較分析を行った。両集落ともに Rukai（ルカイ）および Paiwan（パイワン）少数民族グループのコミュニティであり、類似する文化と社会階層がある。

3. 調査結果

この二つ再建集落は、異なる NGO によって恒久住宅の建設支援が行われた。NGO は従来のコミュニティの主体性を考慮しなかったため、コミュニティ内部の社会関係に影響を与え、現在、それを維持することが困難となった。恒久住宅の建設材料の選択では、少数民族の生活文化に配慮を欠き、伝統的な材料を採用しなかった。住宅の空間構成も居住者の生活習慣の考慮に欠け、間取りは狭すぎるものであった。

このため、災害後 10 年間に、どちらの再建集落でも多くの改築事例が確認された。例えば、住民は少数民族の象徴であるや石製のテーブルや石柱を住宅の正面に設置した。特に石柱はコミュニティの首領の伝統社会地位を示すものでもある。居住空間についても、住民のニーズに合わせて台所を増築し、少数民族の料理を提供するレストランや工芸品の工房を建設した。

4.まとめ

本研究は、1) 台湾における災害後の復興戦略は漢人の考え方にに基づき、少数民族の文化、生活習慣、災害後の経済復興に関する長期的な計画と配慮に欠けていたことを指摘した。2) 少数民族コミュニティは、家の玄関前の装飾と空間調整によって、世帯のニーズを満たすための積極的な住宅の増改築を行った。3) 災害後の復興プロセスは、恒久住宅の完成の時点で終わるのではなく、自ら住宅空間の改良を通じて外部支援機関が解決できない問題を改善し、多様性かつ持続可能性な解決策を実行していることを明らかにした。